

■学校経営のポイント

体験を学ぶにする

喜名 朝博

5月、せっかく学校に慣れてきた1年生も、大型連休でリズムが狂ってしまい、登校を渋ることがある。そんな学校生活に秩序と変化を与え、よりいっそうの充実と発展に向けて体験的な活動を行うのが学校行事だ。遠足や運動会など、子どもたちにとっても楽しいイベントだ。

なすことによって学ぶ

J・デューイの言葉“Learning by doing”は、特別活動の方法原理である。しかし、なすこと(doing)＝体験的な活動は行っても、学び(Learning)になっていないことが多いのではないか。「遠足に行き行って楽しかった」「運動会、みんなで頑張れてよかった」は感想であり、学びを表す言葉ではない。これは、他の教科等で重視される体験活動も同様である。子どもたちは観察・実験は好きだが、理科好きが増えないのは、観察・実験という体験的な活動が理科の本質的な学びにつながっていないからである。生活科や総合的な学習等でも、体験活動が目的化され、「活動あって学びなし」の状況も見られる。

連続性の原理と振り返り

過去の経験が現在の経験に影響を与え、現在の経験が未来の経験に影響を与えるというデューイの連続性の原理は、体験を学ぶにすることの重要性を物語っている。さらにデューイは、そのための手段として、反省的思考(リフレクション)を位置付けた。学校でも「振り返り」として定着しているが、先述のように感想の域を脱していない振り返りも多く、その重要性について再認識し、充実を図ってきたい。

振り返りを充実させる3つの視点

私は、学習活動の質的向上、育成すべき資質・能力の明確化に向け、生活科で「気づきの質を高める」

ことを目指し、以下にあげた3つの視点で授業改善を進めてきた。「振り返り」を充実させるためにも、生活科のこの3つの視点が参考になると考える。

① 潜在的気づきの顕在化

体験的な活動を通して子どもたちはたくさんことに気付く。しかし、気付いていることに気付いていないことがあり、それを言語によって顕在化させることが「振り返り」のポイントとなる。子どもたち同士で振り返りを共有すると、「自分もそうだった」と、気づきが姿を現してくるのだ。

② 振り返りの3つの視点

子どもたちは体験そのものからの気づき、いわゆる対象への気づきには敏感だ。さらに、自分との関わりや他者との関係で振り返ることで気づきの質が高まり、学びのストーリーが生まれる。振り返りの視点として[対象・自分・他者]の3つを意識させることで、体験は概念化され、学びへと昇華していく。

③ 気づきの関連付け

気づきは相互に関連付けられることでより強固になる。振り返りにおいても、過去の体験や既存の知識と関連付けることが重要である。まさに自分のこれまでの学びの道筋を振り返ることで、それぞれの体験が関連付けられ、構造化されていく。

体験を経験にする

お気づきのように、デューイは「経験」、文部科学省は「体験・体験的な活動」という言葉を使っている。辞書の意味は別として、「体験」は、実際に何かを見たり聞いたり行ったりすることを指す。一方「経験」は、体験したことから何かをつかみ、自らの力とすることである。体験は、振り返りを充実させることで経験となり、学びにつながっていく。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●子どもも大人も安心していただける「子どもが主語」の学校のつくりかた。《好評発売中！》

「子どもが主語」の学校へようこそ！

森万喜子【著】 四六判／定価 2,420 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> をご利用ください。

